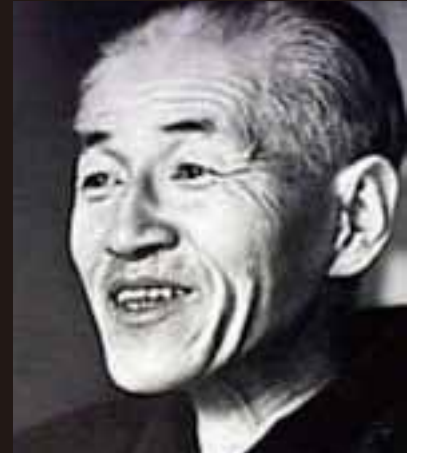




松阪物語

MATSUSAKA STORY



もくじ

伊勢国の名族 北畠氏	1
商都まつさかの基を築いた 蒲生氏郷	3
鈴の音と山桜をこよなく愛でた 本居宣長	6
江戸時代初期の海外貿易家 角屋七郎兵衛	8
西鶴が称賛した日本一の大商人 三井高利	9
江戸で一番の紙問屋 小津清左衛門家	10
松阪木綿の老舗 長谷川治郎兵衛家	11
江戸四大安売り呉服店の1舗 富山与三兵衛家	12
日本一の老舗食料品商社 国分勘兵衛家	13
幕末のチャレンジャー 竹川竹斎	14
北海道の名付け親 松浦武四郎	15
日本茶の輸出関税撤廃に尽力 大谷嘉兵衛	17
戦後日本の農政学、経済学の巨星 東畑精一	19
日本を代表する世界的映画作家 小津安二郎	20

※松坂と松阪の表記について

明治22年の市制・町村制施行により松阪町が発足しましたが、それまでは松坂と表記されていました。この冊子では、上記に倣い松坂と松阪の使い分けをしています。



ちやちやも プロフィール

ちやちやもは女の子です。
松阪市が5周年を迎えたことを記念して平成22年2月に誕生！
世界ブランド「松阪牛」をモチーフに、松阪市の豊かな自然と、
その中ではぐくまれる「おいしいお茶」から緑色をしています。
これから松阪市の顔として活躍していきますので、ぜひ皆さん
可愛がってくださいね！

伊勢国の名族

北畠氏 (伊勢国司)

北畠氏は村上源氏の一流で『神皇正統記』で有名な北畠親房は、南北朝時代にあつて後醍醐天皇の信任も厚く、南朝方の中心的存在として伊勢地方の在地土豪を掌握し、この地に南朝方の拠点的形成しました。

南朝から伊勢国司に任じられたその子顕能は、一志郡多気(津市美杉町上多気)に本拠を構え、その勢力は伊勢、伊賀、志摩、熊野から大和の一部にまで及びました。以後、南伊勢地域は200余年にわたつて北畠氏が統治する国となります。

顕能の孫満雅は、応永21年(1414)、天皇家の継承問題に対する室町幕府の違約を責めて挙兵、翌22年(1415)阿坂城を拠点に幕府軍と激闘をしています。

このとき、阿坂城は幕府軍の兵糧攻めにあい、水不足に悩んだ北畠軍は白米を馬の背に流して水が豊富にあるかのようにみせたという白米伝説を残しています。

以来、阿坂城は別名白米城と呼ばれるようになりました。しかし、阿坂城は落城、北畠軍はその後も抵抗を続けますが、永享2年(1430)に至つて幕府との間に和議が調い、その後140余年、南伊勢は比較的平穏な時期を過ごします。

その後、戦国の世へと移り変わり、永禄12年(1569)に織田信長が大挙して伊勢国に侵攻、これを迎え撃つたのが剣聖塚原卜伝から一の太刀を伝授された剣豪大名として名高い北畠具教でした。文武に秀でた武将と評された具教は、大河内城に主力を集め、5万ともいわれる織田軍を相手に50日余りにわたつて激戦を繰り広げました。しかし、圧倒的な織田軍の前に、信長の実子茶筌丸(のちの織田信雄)を北畠家の養子として家督を継がせることを条件とした和議に応じざるを得ず、ついに織田の軍門に降ることとなりました。そして、天正4年(1576)、信長の謀略により旧家臣の襲撃を受け、具教は49歳で自刃して果てることとなり、ここに名族北畠氏は滅亡します。

古戦場ともいふべき大河内城跡、阿坂城跡がそうした北畠氏の栄枯盛衰を物語るかのように、今もひっそりとしたたたずまいを見せています。



阿坂城跡(白米城跡) 山頂に立つ城跡碑



国指定史跡 あざかじょうあと はくまいじょうあと 阿坂城跡(白米城跡)

松阪市の北部に位置する標高310mの頂上にある阿坂城跡は、南と北の2つの曲輪くるわに分かれています。南の部分が白米城跡、北の部分がしいのきじょうあと椎之木城跡とも呼ばれています。椎之木城跡は、幅40m～70m、長さ150mにも及ぶ大きなもので、こちらの方が阿坂城の中心になっていたようで、台状地をめぐって堀切、土塁等が配されています。

この地をめぐって2度にわたる激戦が展開されました。

最初は応永22年(1415)、北畠みつまさ満雅が北朝の足利軍(室町幕府)5万の大軍を迎えて阿坂城に立て籠った戦いです。この時、幕府軍の兵糧攻めにあい、水不足に悩んだ北畠軍が、水にみせかけた米を馬の背に流して水が豊富にあるように思わせたという話が伝えられており、白米城と呼ばれる所以となっています。

二度目は永禄12年(1569)、全国統一をめざす織田信長が伊勢に侵攻した際に戦われたもので、信長軍はきのしたとうきちろう木下藤吉郎(秀吉)が矢を受けて負傷するほどの苦戦となりましたが、城内に裏切る者があり、ついに落城したと伝えられています。

現在は国指定史跡として恰好のハイキングコースとなり、白米城跡にはそのことを示す碑が建立されています。

県指定史跡 おかわちじょうあと 大河内城跡

標高110m余りの丘陵突端部一帯、300m四方の範囲内に築造され、東裾には阪内川、北裾には矢津川が流れ、南裾と西裾には深い谷がめぐって自然に要害の地を形成しています。城の縄張りは本丸を中心に北をおてぐち大手口、南をからめて搦手門とし、西に西の丸、東に二の丸・御納戸・馬場などを配し、随所に堀切や台状地が残っています。

本城は応永年間、伊勢国司北畠満雅により築城され、弟あきまさ顕雅が入城して、その子孫は代々「大河内御所」を称しました。

永禄12年(1569)8月、本城をめぐって北ともりの畠具教軍と織田信長軍が敵対し50日にもおよぶ籠城戦に苦しみましたが、信長の次男、ちやせんまる茶筌丸(のちののぶかつ信雄)に北畠の家督を譲ることで和睦が成立しています。この一大攻防の結果、本城は難攻不落の堅城と賞賛されましたが、天正3年(1575)には北畠信雄により解体されました。



大河内城跡 本丸跡に立つ「大河内合戦四百年記念碑」

商都まつさかの基を築いた

蒲生氏郷 (1556年～1595年)

蒲生氏郷は弘治2年（1556）現在の滋賀県蒲生郡日野町で、六角氏の有力武将蒲生賢秀の嫡男として生まれました。永禄11年（1568）、織田信長の南近江への侵攻に際して、蒲生賢秀は信長に降ります。その直後、氏郷（幼名鶴千代）は人質として信長に仕えますが、信長は一目で鶴千代の非凡さを見抜き、翌12年の大河内城攻めで初陣を飾らせ、その直後、娘冬姫を氏郷に嫁がせて若年ながら武将の列に加えたといわれています。

当時、文武兼備の武将として有名な稲葉一鉄は「この子の行く末は百万の将たるべし」と賞賛したと伝えられています。

天正12年（1584）羽柴秀吉の命により南伊勢12万石の領主として松ヶ島城に入った氏郷は、同16年（1588）

四五百の森に城を築き、この地を「松坂」と名付けました。氏郷は城下町づくりに当たり、郷里日野町や伊勢の大湊などから商人を招き、商業による町の繁栄に意を注ぎ、のちの“商都まつさか”の基を築きました。

しかし、氏郷の松坂在住はわずか2年で、天正18年（1590）には42万石の太守として会津へ移封となり、その後92万石の太守となっています。わずかな期間で92万石に昇進するという例は他に類をみないことで、氏郷が当時どれほどの大器とみなされていたかがよくわかります。

優れた武人であり、政治家であった氏郷は、当代一流の文化人でもあり、特に茶の湯は千利休の高弟として知られるところで、千利休は氏郷を「文武二道の御大将にて、日本において一人、二人の御大名」と評しています。

しかし、惜しいことに、文禄4年（1595）「限りあれば吹かねど花は散るものを心みじかき春の山風」の辞世を残し、氏郷は40歳をもって、その生涯を終えています。秀吉が世を去る3年前のことです。



「蒲生氏郷画像」
所蔵 愛宕山龍泉寺（松阪市愛宕町）

国指定史跡 まつさかじょうあと 松坂城跡

天正12年（1584）、はしほひでよし羽柴秀吉により松ヶ島城に封ぜられた蒲生氏郷が、いたかくん や がわのしょう飯高郡矢川庄よいほの森の独立丘陵に目をつけ、夜を日に継いで同16年（1588）に入城できたひらやましろ平山城がかつての松坂城です。

城は北東を大手、南東をからめて搦手とし、周囲に堀をめぐらし、本丸、二の丸、三の丸、きたい丸、いんきよまる隠居丸といったくるわ曲輪により構成され、本丸、二の丸、きたい丸、隠居丸には高い石塁を築き、三の丸の周囲は土塁であったとい



国指定史跡 松坂城跡の石垣

います。

てんしゅだい天守台は中央よりやや西に寄り、ここに三層の天守閣がそびえ、それを取り巻いてそれぞれのくるわ曲輪に敵見、金の間、月見等の櫓が配されていました。

城が完成して間もない天正18年（1590）、氏郷が小田原合戦の功により、42万石の太守として会津に移封されたため、翌年、はっとりかずただ服部一忠が3万5千石を領して松坂城主となりました。

その後、ふる た しげかつ古田重勝が城主となりましたが、その古田家も移封となり、元和5年（1619）にとくがわよりのぶ徳川頼宣の領地となったため、以後松坂にはきしゅうはんせいしゅう紀州藩勢州領18万石を統括する松坂城代が置かれました。

紀州藩領下の松坂城に関して、史料には正保元年（1644）に天守閣が大風のため倒壊して土台だけになったと記されています。その後、寛政6年（1794）には、二の丸の二の丸御殿（ごてん とくがわじん や徳川陣屋）が改築されていますが、これは明治10年（1877）、失火のため惜しくも焼失しました。残っていた他の表門、裏門、中御門、土蔵等も同14年頃までには取り壊され、当時の城中の建物としてはもと隠居丸にあった米蔵とされるものが、現在、ごじょうばん や しき御城番屋敷横に残っています。

松坂城跡は、平成23年2月7日に国指定史跡になりました。

ごじょうばん やしき 御城番屋敷

御城番屋敷は、その名のとおり江戸時代末に松坂城の警護の任にあたった40石取りの紀州藩士20人と、その家族が住んでいた屋敷です。屋敷は松坂城の裏門跡と搦手門(竹御門)跡とを結ぶ道路の両側にあつて、主屋2棟と前庭、畑地、土蔵、南龍神社からなり、約1ヘクタールの屋敷地は周囲に塙垣をめぐらしています。現在の主屋については、ある史料に「曲輪内の畑地へ両側20軒の長屋を建て、文久3年8月下旬引っ越す」とあつて、文久3年(1863)に藩士20人の松坂来住に際して新築されたものであることがわかります。



国重要文化財 御城番屋敷

江戸時代の組み長屋の現存例は、全国的にも山口県萩市などに例があるのみで、御城番屋敷は現存例の中でも最大規模で、住居として質的に最も充実しています。それに加えて、主屋以外に前庭、畑など塙垣でとり囲まれた敷地全体がよく残り、建築年代と由緒が明確であることと相まって大変貴重なものとなっています。

また、かつては松坂城内隠居丸にあった米蔵を移築したといわれる土蔵や、藩祖徳川頼宣を祀る南龍神社を加えた御城番屋敷の一面は、歴史豊かな町並みとなっています。

松阪市は、平成元年度、同屋敷の景観整備事業を行い、電線を主屋の軒先へ移設し、主屋上のアンテナを撤去して共同化するとともに、主屋間の道路の舗装を屋敷の景観に合わせて石敷きに改めました。

その後、屋敷を訪れる方のために、西棟北端の一戸を借り受け、当初の姿に復元整備したうえで平成2年4月より一般公開しています。

主屋2棟は、国の重要文化財(指定名称は「旧松坂御城番長屋」)、土蔵は県の有形文化財に指定されています。

鈴の音と山桜をこよなく愛でた

こくがくしゃ
国学者

もとおりのりなが
本居宣長 (1730年～1801年)

江戸時代の松坂は、日本の経済の一翼を担う松阪商人の本拠地として、また伊勢の神宮へ向かう旅人が西から東から集まる街道の町としてとても耀っていました。

この町から18世紀最高の日本古典研究家・本居宣長は、「^{こくがく}国学」という新しい学問を全国に向けて発信したのです。

本居宣長は、享保15年（1730）、松坂の^{おづ}小津家に生まれました。父は^{おづさだとし}小津定利。江戸店持ち商人として木綿を商い繁栄した家でしたが、読書を好んだ宣長は、商売をやめて医者^{うおまち}の道を選びます。京都で5年間の修行を終えて28歳の時に魚町の自宅に帰り、以後72歳で亡くなるまで、昼間は医者^{うおまち}を、夜には町の人々に古典を講釈し、研究をするという生活が続きました。

宣長は、学問をする器械のような人です。本居宣長記念館に展示される原稿や日記を見るとよくわかります。

最初から最後まで筆跡が変わりません。書き漏らしや、誤字や脱字もほとんどありません。とても端正で読みやすい印刷されたような文字です。日本や中国の古典や言葉、歌など頭の中の膨大なデータベースをもとに、机に向かったら^{きょうじん}強靱な集中力で研究をしたのでしょう。

そんな宣長でも勉強に疲れ、また眠くなることもあります。その時、気分転換のために鳴らしたのが「^{はしらかけすず}柱掛鈴」でした。さやさやと鳴る鈴を掛けた四畳半の書斎には「^{すずのや}鈴屋」と名前が付けられました。今も松坂の町のあちこちで鈴の絵やモニュメント、また「ベル」という名前を目にするのは、鈴の音に心を癒やし研究を続けた宣長を誇りに思う町の人たちの気持ちからなのです。

皆さんは「もののあはれ」と言うすてきな響きの言葉をご存じですか。

世界的な評価を受けている映画監督・^{おづやす}小津安



「本居宣長六十一歳自画自賛像」
所蔵 本居宣長記念館



国特別史跡 本居宣長旧宅（鈴屋）

二郎（1903～63）は、自分の映画のテーマは「もののあはれ」だと言っています。実はこの言葉は、宣長が日本人の繊細な心や美意識を表現するのに使ったのが最初なのです。宣長が、紫式部の『源氏物語』は、「もののあはれを知るの一言に尽きる」のだと主張したことで、それまでの『源氏物語』評価は一変し、日本を代表する古典となったのです。ちなみに小津安二郎は、宣長の生まれた小津家とも関わりのある松阪商人の末裔で、青少年期をこの町で過ごしました。

「もののあはれ」と言う言葉の発見に象徴されるように、宣長は生涯をかけて、日本古典の中から日本人の心を探し続けました。中でも現存最古の歴史書『古事記』の解説は、半生を費やす大事業となりました。この本の中に、日本人のものの考え方や心情を解く鍵があると確信した宣長は、34歳の夏の夜、参宮の途中、松阪日野町の新上屋に泊まった賀茂真淵とのたった一夜の出会い（松坂の一夜）を契機として、その指導を受けながら研究に着手したのです。

江戸の真淵と松坂の宣長。遠く400kmも離れた師弟が手紙で質疑応答をするという通信教育が可能となったのも、また研究に必要なたくさんの資料を居ながらにして入手できたのも、この町が情報の集積地であり、旅人が往来する場所だったからにはほかなりません。

心力を尽くした『古事記伝』44冊が書き終わったのは、宣長69歳の夏でした。執筆開始からすでに35年がたっていました。それから3年後、享和元年（1801）9月29日、宣長は72歳の生涯を閉じました。『遺言書』の指示により、山室山に奥墓が、また菩提寺樹敬寺にも墓が造られました。12歳から亡くなるまで住んでいた魚町の家は、現在松坂城跡に移築されて公開され、その隣には、宣長の遺墨・遺品など16,000点（内、国重要文化財1,949点）を保存し展示している本居宣長記念館があります。



本居宣長記念館

江戸時代初期の海外貿易家

かどやしちろべえ 角屋七郎兵衛 (1610年～1672年)

角屋家は伊勢のおおみなとから蒲生氏郷に招かれて松阪に移り住んだ海運業者で、その一族が住んだところが現在の湊町です。

この角屋の先祖は、天正10年(1582)6月の「本能寺の変」のとき、泉州堺から伊勢のしろこ(鈴鹿市)まで危難を避けてたどり着いた徳川家康を、その持ち船で三河国まで送り届けたことがあり、のちに天下をとった家康から「領国内の港への出入自由、諸役免除」の御朱印状を与えられました。

松坂で生まれた次男の七郎兵衛栄吉は、成人するとこの特権を生かして海外貿易家になることを決意し、寛永8年(1631)22歳の時に安南国(今のベトナム)に渡り、現在も日本町の面影を残すフェフォ(ホイアン市)に居を構えました。そして、現地の娘を妻に迎えて、いろいろな文物を故国にもたらしめています。また、七郎兵衛は松坂の来迎寺・岡寺・龍泉寺や伊勢神宮などにも、金銭を寄進しています。

ところが、間もなく日本では鎖国令が出され、帰国するかどうか、最後の決断の機会がきました。

七郎兵衛はもとよりこの地に骨を埋める覚悟でした。その後、晩年にはフェフォの日本町の頭領になり、またつり鐘や山号の額などを郷里から取り寄せ、その地に松本寺という自分の寺を建てています。

寛文12年(1672)、異郷で63歳の生涯を終えた彼は、念願どおり松本寺に葬られますが、妻の妙泰からの手紙には、朝夕に香花を供え菩提を弔っている旨が、見事な筆づかいでしたためられており、340年余り前の国際結婚の美しいロマンとして、今なお心を打つものがあります。なお、松坂の来迎寺には七郎兵衛の供養塔や一族の墓も残されています。

七郎兵衛が生前故国にもたらしした文物の中には、「柳条布」ともいわれた「南方裂」があり、やがて松阪商人の才覚で木綿織りに取り入れられたその斬新なデザインは、「松坂嶋」の名で長い間、お江戸のファッションとなり、太物(松阪木綿)を扱う江戸店の目玉商品となったといわれています。



角屋朱印船

西鶴が称賛した日本一の大商人

みつ い たかとし
三井高利 (1622年～1694年)

松坂で金融業を営みながら、江戸店を持つために資金蓄積に励んでいた高利が、江戸本町一丁目に間口九尺(2m70cm)の「越後屋」を開店したのは、延宝元年(1673)高利52歳の時でした。

それから10年後には駿河町に大店を構え、さらに4年後には、商人の最高の名誉である幕府御用達に加えられるまでになりました。

高利の商法は画期的なもので、当時一般の呉服屋がやっていた見世物商(あらかじめ得意先を回って注文を聞き、後で品物を届ける方法)

や屋敷売(商品を得意先に持参して売する方法)に対し、店先売(商品を得意先に持参して売する方法)に今日行われているような店頭販売を行い、掛売りが通例であった当時に、「現金掛け値なし」の看板を掲げました。また、呉服は一反が売単位であったものを、客の求めにより切り売りに応じ、仕立屋に持参して着物や羽織りを作らせた時代に、急ぎの客には職人が手分けしてその場で仕立てて着せて帰すことまでしています。こうした独創的な工夫の中には、店前に雨傘を備えておいて夕立などの時には客に自由に使用せ、たくまずして江戸中に「越後屋」と書かれた番傘が広がるといったユニークな移動広告も考え出しました。その時の模様は「降り出すと江戸へ広がる駿河町」と江戸川柳にもうたわれています。

従来の慣習にとられないこうした高利の商法は江戸庶民の間で爆発的な人気を博し、その繁栄ぶりは大変なもので、井原西鶴の『日本永代蔵』には、高利を評して「大商人の手本なるべし」と称賛されています。

「越後屋」はのちに「三越」となり、三井財閥となって日本経済の中で大きな位置を占めますが、松阪市本町にある三井家発祥地はその歴史をしのばせています。



「三井高利福夫妻肖像画」 所蔵 松阪市



「東都三井店之図」 所蔵 西方寺(松阪市清水町)

江戸で一番の紙問屋

おづせいざえもん 小津清左衛門家

江戸時代の松坂には、小津清左衛門家、小津与右衛門家、小津茂右衛門家のように、小津五十党と称されるほどの小津姓を名乗る商人が多かったといわれています。中でも小津清左衛門長弘ながひろは、寛永20年（1643）に大伝馬町草分けの「佐久間善八紙店」に奉公したのち、承応2年（1653）に同郷の木綿商小津三郎右衛門道休どうきゅう（本居宣長の曾祖父）の資金援助と小津屋を名乗ることを許されて紙問屋を開業しました。紙の時代といわれた元禄文化の波に乗った清左衛門は傍系であるにもかかわらず、その人物の実力を認められて小津党の長老となり、紙問屋40余店を束ねるほか、木綿問屋の経営にも乗り出しています。

小津清左衛門家の実力を示すものとして、明治維新の際に商人に割当てられた御用金をみると、総額86万両の内訳は、三井五家で30万両、鹿島一統かしまいつとう15万両、小津清左衛門6万両の順となっています。

明治以降は、銀行・紡績工場などを設立して多角経営に乗り出しますが、関東大震災や金融恐慌などの難局を乗り切るため、本来の紙卸問屋に復し、現在も創業以来の地で小津産業株式会社として営業を続けています。本社ビル内には、小津和紙博物館・小津史料館が開設されています。

松阪市では、平成3年度と5年度に本町の旧小津邸を購入し、平成4年度から5ヵ年計画でその内部の復元に取り掛かり、平成8年10月から「松阪商人の館」として一般に公開されており、当時の豪商ぶりをうかがい知ることができます。



旧小津家住宅（松阪商人の館）

松阪木綿の老舗

は せ が わ じ ろ べ え 長谷川治郎兵衛家

長谷川家が江戸^{おおでん まちょう}大伝馬町に松阪木綿の店「丹波屋」^{たんば や}を開いたのは、延宝3年（1675）3代政幸^{まさゆき}のときです。

その2年前の延宝元年には三井高利が江戸へ店を出していますが、このころ江戸店をもつことが一つの気運となり、多くの松阪商人が相次いで江戸の^{にほんばし}日本橋界限へ進出しています。

政幸は江戸進出に当たり、三井高利のように斬新さを売り物にした商法は好まず、みんなが地道にもうかる方法を考え、仲間とともに伊勢地方の木綿の買い付けを専門に行うための^{せいしゅう もめんかいづぎどん や}勢州木綿買次問屋^{くみあい}組合を設立して、大伝馬町における松阪商人の結束を目指しました。

大伝馬町一丁目の木綿問屋街は江戸中期には74軒を数えましたが、その後、時代とともに集約化が進み、天明年間（1780年代）には20軒となり、この数は幕末までほぼ維持されることとなります。長谷川家はその4分の1に当たる5店を経営したことは特筆に値します。

^{きのくにやぶんざえもん}紀伊国屋文左衛門（通称紀文）や^{ならやもぎえもん}奈良屋茂左衛門（通称奈良茂）が巨富を積み、遊里で節分の豆の代わりに小判をまいたとか、江戸中の初がつおを一人で買い占めたとかの話題をまいたとき、長谷川をはじめとする松阪商人は、ひたすら節約と努力を重ねていました。奈良茂が正徳4年（1714）に没したときに残した財産13万両余と、長谷川本家の安永7年（1778）の純資産14万両余りとを比較するとき、歴史を騒がした材木商と地味で名を売らなかった松坂の木綿商との、あまりにも好対照な生きざまに感慨深いものを覚えます。

長谷川家主屋の格子、霧よけ、うだつの上がった屋根や黒漆喰の塗られた土蔵は、長谷川家の江戸時代における繁栄ぶりをしのばせるかのように、今も堂々たる威容をみせています。



長谷川邸

江戸四大安売り呉服店の1舗

とみやまよさべえ 富山与三兵衛家

伊勢商人を代表する先駆者として、最も有名なのが射和の富山家です。富山家が後北条氏ごほうじょうしの城下町・小田原おだわらで呉服商を始めたのは天正13年（1585）のこととされています。後北条氏滅亡ののちは徳川家康を追って江戸に移り、寛文3年（1663）には江戸本町に「大黒屋呉服店」だいこくやを構えました。それ以後の富山家の発展はまことにめざましく、またたく間に江戸、京都、大阪に店舗網を張りめぐらし、最盛期といわれる正徳5年（1715）には15万両余の資産を有するに至るなど、豪商富山家の名は広く天下に知られるところになります。

そのころの富山家の繁栄ぶりは、「伊勢の射和の富山さまは、四方白壁八ツ棟造り、前は切石切戸の御門、裏は大川くしだがわ（櫛田川）船が着く」とわらべ唄にまでなりました。また、井原西鶴は『日本永代蔵』の中で、「才覚を笠に着た大黒」と、その羽振りの良さに反発するかのような評を記しています。

しかし、さしもの富山家も江戸時代の中ごろには急速に衰退に向かい、文化5年（1808）には事実上の破産状態に陥り、同12年（1815）13代定豪さだかつが病没するにおよんで大黒屋富山家の栄光に満ちた歴史は幕を閉じます。

豪商富山家が江戸時代における商人の実態を極めて生き生きと今に伝えているのは、日本最古の会計帳簿といわれる「足利帳」たしりちゆうをはじめとする貴重な史料を多数残しているからです。現在それらの史料は一括して東京の国文学研究資料館に保管されています。

また、射和町にある伊馥寺いづわは富山家の菩提寺いふくじで、富山家の何代にもわたる人びとの墓碑が立ち並んでいるのを見ることができます。



かつて射和にあった富山邸

日本一の老舗食料品商社

こくぶかんべえ 国分勘兵衛家

国分家は、代々の当主が勘兵衛を名乗り、現在の当主は12代目です。

正徳2年（1712）4代目勘兵衛宗山は、常陸国（今の茨城県）土浦に醤油醸造場を設け、江戸日本橋本町に店を構え、屋号を「大国屋」と称しました。

関東平野の上質の大豆と小麦を原料とした大国屋醤油は美味で、土浦亀城の「亀」と大国屋の「大」を六角の枠にはめた「亀甲大」印の醤油は大変評判となりました。中でも「むらさき」という銘柄の醤油は極上の酒よりも高価で売られたといい、のちに醤油の代名詞のように使われました。今でも料亭やすし屋で醤油のことを「むらさき」と呼ぶことがあります、そのルーツはここにあります。

この「むらさき」の命名については、次のような話が残っています。国分勘兵衛は筑波の山並みが一日のうちに七色に変わっていくのを眺め、とりわけ山肌が紫色に染まったときの美しさに心を打たれ、自家醸造の醤油に「むらさき」と命名したというものです。

大国屋は、その後明治維新を迎え、醤油醸造業を廃業し、広く食品販売を業とする問屋として、明治21年（1888）には他社に先駆けてビールの販売を手がけ、同41年にはおなじみの「K&K」印を商標とし、さらに大正8年（1919）にはカルピスの将来性に着目して、発売と同時に取り扱いを開始するなど、たえず時代を先取りしつつ、めざましい発展を遂げてきました。

今日、社名も「国分株式会社」と改め、江戸店のあった日本橋1丁目1番地に堂々たるビルを構えて、日本一の総合食品商社として、以来300年の歴史があります。

松阪市射和町には、今も亀甲大の商標のある5つの蔵を有する国分邸が、江戸時代の豪商「大国屋」の面影をしのばせてくれます。



国分邸

幕末のチャレンジャー

たけがわちくさい 竹川竹斎 (1809年～1882年)

竹川竹斎は、文化6年(1809)に射和の豪商竹川家の分家、東竹川家に生まれ、本居宣長の門下でもあった政信を父とし、賀茂真淵の高弟荒木田久老の娘菅子を母としました。12歳の秋、家業見習いのため江戸店に入りますが、恵まれた学問的環境の中で育ったこともあって、国学はもとより農政学をも修め、また、のちには明治維新の立役者となった勝海舟、大久保一翁、山岡鉄舟らとも親交を結び、海外事情にも目を開いていきました。

嘉永6年(1853)のペリー来航に刺激を受け、『海防護国論』を著し、海舟を通じて幕府に提出するなど、文明開化の先駆者的存在でもありました。そのため、慶応2年(1866)には幕府勘定奉行の小栗上野介や老中小笠原壱岐守と面談し、国策について意見しています。また、経世済民の実践家としては、郷里にあってため池の築造や桑・茶園の開発を進めて地元の繁栄を図り、教育家あるいは文化人としては、古万古の復興を試み、射和万古を興すなど大きな足跡を残しました。

ことに、24、5歳からの念願で開設した「射和文庫」は、若いころ読書をしたくても思うようにまかせなかった彼が「いかで、壺万ばかりの書をあつめて、志ある人には心やすくよませ」ようと多額の私費をつぎ込み、一族にも呼びかけて開いたもので、日本の私立図書館の草分けともいえるべきものです。名実ともに完備したのは、嘉永7年(1854)とされ、古瓦、古鏡、古銭なども収蔵、海舟から贈られたへん額が掲げられていました。

毎月の例会には、自らも古典などを講義し、ときには茶をたて、歌を詠み、香をきくなどして、さながら文化サロンのようであったところにも、竹斎の人柄が表れています。明治15年(1882)74歳で亡くなりますが、その功績を後世に伝えるため、村民や親交のあった人々の手により、さまざまな顕彰碑が建立されました。

現存する竹川邸は、玄関、茶室、座敷などがその当時のままによく残されており、勝海舟、山岡鉄舟などの書も大切に保管されています。



「竹川竹斎画像」

北海道の名付け親

まつうらたけしろう 松浦武四郎 (1818年～1888年)

松浦武四郎は、文化15年（1818）に一志郡須川村（現在の松阪市小野江町）で、紀州藩の地士を務める松浦家の四男として生まれました。その誕生の地（市指定史跡）は、伊勢神宮へと続く伊勢街道に沿っており、江戸時代に全国各地からやって来るおかげ参りの旅人でにぎわいました。武四郎は7歳の時、近くのお寺で読み書きを習うと、各地の名所を図入りで紹介した『名所図会』を愛読します。13歳の頃には、「文政のおかげ参り」が起り、一年間で約500万人が伊勢神宮を目指して全国各地から押し寄せたとされます。家の前を行き交う旅人に大きな刺激を受けた武四郎は、16歳で家を飛び出して江戸へ旅し、17歳からは日本全国をめぐり歩きました。19歳で四国八十八ヶ所の霊場を巡り、20歳で九州へ渡ると、長崎で出家して「文桂」という名の僧侶となり、平戸では住職を務め、壱岐・対馬まで渡ります。武四郎の眼は、



「松浦武四郎画像」

その先にある朝鮮、さらには中国・インドへと向けられましたが、鎖国のため朝鮮へ渡ることはできず、長崎でロシアが蝦夷地（今の北海道）を狙っていることを知ると、まだ詳しい様子がわかっていなかった蝦夷地の探査を決意します。そして、28歳から41歳にかけて6度も蝦夷地・千島列島・樺太の探査を行い、先住の民であるアイヌ民族と出会うと、アイヌの人びとに案内をしてもらいながら道なき道を歩きました。6回の探査の記録は151冊にまとめられるとともに、9,800にもものぼるアイヌ語地名を収めた大型の蝦夷地地図の出版も行いました。また、アイヌ文化のミニ百科事典ともいえる『蝦夷漫画』や、アイヌの人びとの姿をありのままに記録した『近世蝦夷人物誌』を著すなどして、アイヌ民族への正しい理解を求め、アイヌの人びとの生命、文化を守ることを幕府に訴えます。そのため、松前藩から調査の妨害や命を狙われることになりましたが、武四郎は決してその姿勢を崩すことなく、信念を貫きました。

幕末には吉田松陰など数多くの志士たちとも交流し、蝦夷地に最も詳しい人物との評価を得ました。やがて、時代は明治維新を迎えると、大久保利通の推挙により明治政府へと登用され、開拓使では長官、次官に次ぐ判官にまで任じられます。明治2年（1869）、蝦夷地に替わる名称の撰定に携わった武四郎は、「日本の北にあり、アイヌの人びとが古くから暮らす広い大地」という思いを込めて「北加伊道」を提案し、現在の「北海道」の名称が生まれました。武四郎が目指したのはアイヌの人びとが安心して暮らすことができる北海道でしたが、アイヌ民族への政策をめぐって反発し、政府を辞します。



野に下った武四郎は、「馬角齋」と号し、各地を旅して古物を収集したほか、天神信仰にも篤く、菅原道真にゆかりの深い25ヶ所の天満宮へ賛同者を募って神鏡を奉納し、石標を建てました。また、68歳から70歳にかけて、三重と奈良の県境にそびえる大台ヶ原へ登り、70歳で富士山に登るなど、老いてなお旅の心は衰えませんでした。70歳を前にして足腰の衰えを感じていた武四郎は、これまでの旅を通じて出会った全国各地の人びとに頼んで、その土地その土地の古社寺などで使われた古材を送ってもらいます。その古材を用いて畳一畳の書齋「一畳敷」(国際基督教大学構内にある泰山荘に現存)を自宅に建て、これまでの旅の人生を懐かしげに振り返りましたが、明治21年(1888)に71歳でこの世を去りました。

松浦武四郎記念館

松浦武四郎記念館は、武四郎の貴重な資料を後世に残し、紹介する目的で平成6年に開館しました。館蔵資料は、武四郎が著した日誌、地図、書簡、絵画などが中心ですが、武四郎が蝦夷地の探査で持ち帰ったアイヌ民族資料も収蔵しており、現在1,503点の資料が国の重要文化財に指定されています。展示室では二ヶ月に一度展示資料を入れ替えているほか、充実した映像コーナーや武四郎冒険すごろくクイズなどもあり、多彩な分野で活躍した武四郎の姿を紹介しています。

また、松浦武四郎記念館から徒歩約7分のところに、松阪市の史跡に指定された「松浦武四郎誕生地」があり、武四郎のふるさとの

わが家が、かつての姿で残されています。家の前を通る道は、江戸と京を結ぶ東海道が四日市の日永で分岐し、伊勢神宮へとつながる「伊勢街道」であり、武四郎の誕生地がある小野江町から、南に伊勢街道を進んだ松阪市中心部にかけての区間は、社団法人日本ウォーキング協会が選定した「美しい日本の歩きたくなる道 500選」に選ばれており、市場庄町では格子戸が美しい街並みをご覧ください。



松浦武四郎記念館



松浦武四郎誕生地

武四郎を縁としたアイヌの人びととの交流

武四郎が行った6度に及ぶ蝦夷地探査は、アイヌの人びとの協力がなくては、なし遂げられるものではありませんでした。武四郎は、寝食をともにした探査でアイヌの人びとと深く交流し、アイヌ文化を愛した、異文化理解・多文化共生の先覚者でもありました。

松阪市では、武四郎が2月6日に生まれ、2月10日に亡くなったことにちなんで、武四郎の功績をたたえとともに、武四郎が深く交流したアイヌの人びとの伝統文化に触れていただくことで、アイヌ文化への理解を深めてもらおうと、毎年2月の最終日曜日に「武四郎まつり」を開催しています。武四郎まつりでは、北海道各地で活動されているアイヌ民族文化保存会のみなさんをお招きし、国重要無形民俗文化財に指定されたアイヌ古式舞踊を披露していただいております。武四郎が北海道と松阪を結ぶ懸け橋となって、今も交流を深めています。

日本茶の輸出関税撤廃に尽力

茶聖 おおたにかへえ 大谷嘉兵衛 (1844年～1933年)

大谷嘉兵衛は弘化元年（1844）12月22日、伊勢国飯高郡たんの谷野村（現在の松阪市飯高町宮本）に、父吉兵衛、母つなの四男一女の末子として生まれました。

19歳で横浜の茶商小倉藤兵衛へ奉公したのち、居留地のスミス・ベーカー商会の製茶買い入れ方として雇われ、海外との取引責任者となりました。

明治5年（1872）には、粗製の防止と品質の改良のため、製茶改良会社を設立し、輸出製茶の品質向上に尽くし、同17年（1884）、農商務省を説いて全国の茶産地に茶業組合を設立、また全国組合として中央茶業本部を創設しました。

明治31年（1898）アメリカは日本茶に対し、輸出茶の原価に相当するほどの厳しい関税を課してきました。そこで翌年（1899）、全国茶業者大会において茶関税に



対する対策を協議し、嘉兵衛は撤廃運動のために渡米を決意し、アメリカ・フィラデルフィアでの「万国商業大会」に日本を代表して参加し、関税の廃止を主張し続けました。そして、アメリカの財務長官や農務長官を訪問し茶関税撤廃に努力しつづけた結果、大統領ウィリアム・マッキンリーとの会見を許されることとなり、明治36年（1903）ついに関税が撤廃され、日本茶の輸出は活気を呈することになりました。同40年（1907）にはその社会的功績と多額納税の功績により貴族院議員に選ばれ、勲三等に叙せられています。

その後、茶業組合中央会議所会頭、日本紅茶株式会社を設立し社長に就任するなど、その生涯を日本茶一筋に捧げますが、昭和8年（1933）2月、横浜で90歳の生涯を終えました。

大谷橋架橋

嘉兵衛の故郷は、東西に櫛田川が流れ、兩岸を結ぶ橋のほとんどは低い丸木の一本橋でした。そのため大雨のたびに橋が落ち、人びとの生活は大変苦しいものになり、子どもたちは対岸へ通学することもかなわず、長い間人びとは、じょうぶな橋を架けてほしいと願ってきました。

故郷を愛してやまない嘉兵衛は、経費の大部分を出資し、早速工事に着手することとしました。明



治29年（1896）9月に近代的な高架の橋が落成し、「大谷橋」と命名されました。この橋によって、増水時にも交通遮断されることなく、子どもたちも安心して通学できるようになりました。現在の大谷橋は4代目です。



大谷橋

お熊が池（南湖）^{なんこ}

嘉兵衛は、故郷の南方の山頂の窪地にあるお熊が池を尊崇し、これを「南湖」と呼び、生涯にわたって精神のよりどころ、心の故郷としていました。

この池は、昔から雨乞いの池として有名で、池の中には弁財天が祀られ、毎年祭礼が行われています。

今では、池のほとりまで舗装された林道が延び、気軽に訪れることができます。



お熊が池

松阪市飯南茶業伝承館

茶業振興、茶製造技術と歴史の伝承を目的に平成9年度に完成した茶業伝承館は、実際に製茶できる35キロラインの製茶工場を併設しています。展示室には、手揉み茶用の「ほいろ」をはじめ、お茶に関する様々な道具を展示し、予約をすれば手揉み茶体験もできます。



松阪市飯南茶業伝承館

戦後日本の農政学、経済学の巨星

とうはたせいいち

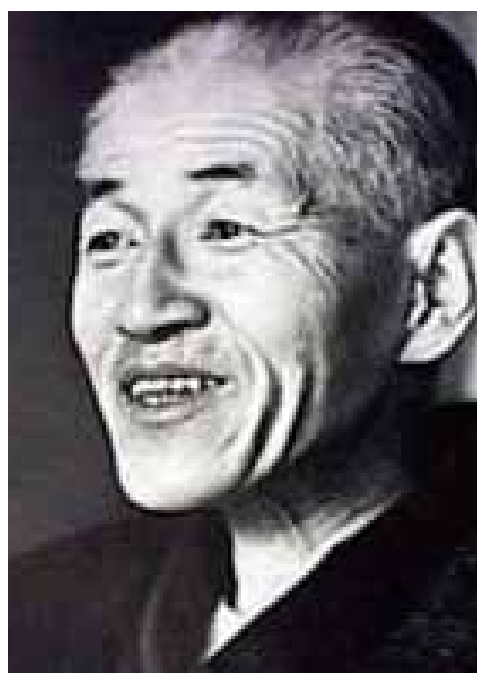
東畑精一（1899年～1983年）

大正・昭和という激動の時代に、農業の近代化、戦後の農業経済の立て直しなど、偉大なる農政学者としてたくさんの功績を残した東畑精一は、明治32年（1899）、一志郡豊地村井之上（現在の松阪市嬉野井之上町）の地主であった東畑家の長男に生まれました。現存する旧宅は、すでに人手に渡っていますが、旧家の屋敷らしい面影が残されています。その居間には、祖母の弟にあたる矢土錦山やづちきんざんの書が今も掛けられています。

幼少の頃は、同級生たちと田園山林を走りまわり、雀取りなどに夢中だったようです。精一は、津市の県立第一中学校に進学し、それから第八高等学校を経て、東京帝国大学（現在の東京大学）農学部に入學しました。その後、東京帝国大学で助教授として10年余、教授として25年余にわたり、農政学と農業経済学を研究し、後進の育成にあたりました。

近代日本における農業経済学の基礎をつくり、日本の農業を経済的対象としてとりあげ、初めて国民経済の一環として体系づけたといえます。また、海外留学中にはボン大学で、世界的な経済学者であるシュンペーターに師事し、最先端の経済学について学びました。当時の日本の経済学に、世界の経済学の主流を送りこみ、日本での近代経済学を確立しました。戦後すぐの吉田茂内閣組閣時に、ぜひとも農林大臣にと首相自ら声をかけたというエピソードは有名です。政治の表舞台には立ちませんが、米価審議会・経済審議会・税制調査会など、各種政府諮問機関の委員・会長を歴任しました。

昭和45年（1970）には、文化功労者に選ばれ、同50年（1975）には勲一等旭日大綬章、55年（1980）には文化勲章を受章しています。そして、58年（1983）、84歳で永眠しました。地元への関わりとしては、三重県社会経済研究センターの設立などがあげられ、嬉野川北町の三重県農業研究所には、本人から寄贈された「東畑記念館」が建てられています。そして、多くの著書とともに生前の業績や戦後の農政などを知る貴重な資料など約9,000点が、三重県立図書館に「東畑文庫」として大切に保管されています。



日本を代表する世界的映画作家

おづやすじろう 小津安二郎 (1903年～1963年)

近年、新たな角度から世界の注目を集めている映画監督・小津安二郎ですが、彼は青年期の一時期を松阪で送っています。安二郎は明治36年（1903）、東京深川の肥料問屋「湯浅屋」東京店支配人の二男として生まれましたが、父が松阪の小津家本家の使用人ということもあって、大正2年（1913）10歳のときに母、兄、妹と4人で松阪へ移り住み、松阪町立第二尋常小学校の4年に転入しています。小学校当時の資料は、昭和26年（1951）松阪大火で焼失してしまってほとんど現存しませんが、勉強もよくでき、都会育ちの転校生である彼はよく目立ったといわれています。

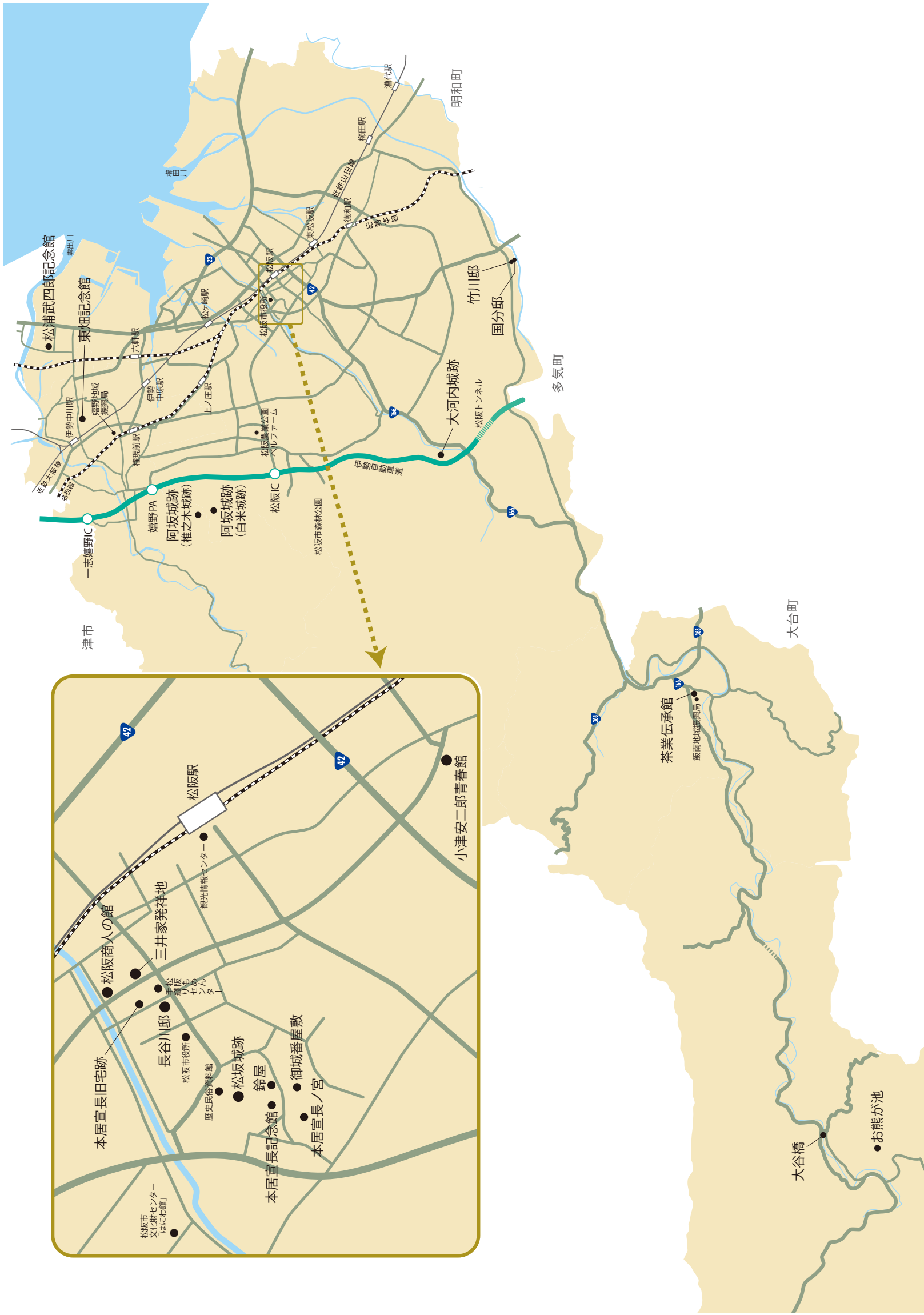
その後、県立宇治山田中学校を卒業し、飯高町の宮前尋常小学校の代用教員となり、大正12年（1923）20歳で父の住む東京に帰るまでの10年間、この松阪で過ごしています。松阪の住居は現在の愛宕町の三角公園近くでしたが、今では当時の面影は残っていません。

また、このころから、映画好きで、アメリカ映画を見に名古屋あたりまでよく出かけていたようです。のちの昭和24年（1949）に、シナリオ作家の野田高梧氏とともに松阪を訪れた際、当時愛宕町にあった映画館「神楽座」の前で、「もし、この小屋がなかったら、僕は映画監督になっていなかったんですよ」と述懐しています。

東京に戻った彼は松竹キネマ蒲田撮影所に入所し、監督となってからは低いカメラアングルによる厳格な形式美の中に真の人間性を独特の手法で描き、「生まれてはみたけれど」「一人息子」「父ありき」「晩春」「麦秋」「東京物語」「彼岸花」「秋刀魚の味」など、日本映画史上にさん然と輝く名作を残し、昭和37年に映画界初の芸術院会員となっています。これらの作品群はその優れた日本的表現ゆえに、逆に海外では評価されることはないだろうと考えられ、国際映画祭にはほとんど出品されませんでした。しかし、近年になってその評価が内外でとみに高まり、現在では溝口健二、黒澤明らと並んで日本を代表する世界的映画作家として高い評価を得ています。



小津安二郎青春館



松阪市観光交流課

<http://www.city.matsusaka.mie.jp>



表紙の縞柄は、三重の伝統工芸品に指定されている松阪もめんの縞柄をモチーフにしたものです。松阪もめんは藍で染めた糸で織られた布で、洗うほどに色が冴え、たくさんある縞模様が特徴です。かつて江戸に店を持つ松阪の豪商が、安くて丈夫で柄ゆきの新鮮な松阪もめんを目玉商品として販売したところ、粋を好む江戸っ子に大いにうけました。